

第3類

保育音楽療育演習における実習経験の共有をめざす教育実践 [Ⅱ]

—「実習前のリハーサル」と「実習後の報告」の有効性—

朝野典子

ASANO Noriko

本稿は、夙川学院短期大学専攻科保育専攻において筆者が担当する保育音楽療育演習の教育実践に関する研究である。当科目では音楽療育活動の実践方法の習得をめざし、「実習前のリハーサル」と「実習後の報告」によって学生同士が実習経験を共有する仕組みをつくり指導を行ってきた。

2009年度履修生（45名）および2010年度履修生（13名）、合計58名を対象として実習終了後に実施した記述式アンケートでは、「自分のリハーサル」「自分の報告」「他者のリハーサル」「他者の報告」の有効性についてそれぞれ質問し、回答を得た。

その結果、「実習前のリハーサル」と「実習後の報告」は全体を通して、「Plan（計画）→Do（実行）→Check（評価）→Act（改善）」の4段階を繰り返すことにより継続的な改善を行うPDCAサイクルと同様に機能し、保育音楽療育士の育成において有効であったと考える。

キーワード：保育音楽療育、実習、リハーサル、実習報告、共有、PDCAサイクル

1. はじめに

保育音楽療育士とは、一般財団法人全国大学実務教育協会が認定する資格であり、資格取得のための教育目標として「障害児教育において、発達的な視点を入れながら、保育と音楽療育に関して高度の知識と技能をそなえた障害児の専門職として、さらに生涯学習に関与できる人材の養成を目指す」と掲げられている。

この教育課程では必修科目に保育音楽療育実習（以下、実習と記す）が含まれ、学生は児童から高齢者まで幅広い領域において実習を行い、障害児や高齢者への生活支援を学びながら、学生自身が作成したプランに基づいて音楽療育活動を実践する。

筆者は、2008年度より夙川学院短期大学専攻科保育専攻において、保育音楽療育士養成課程の必修科目である保育音楽療育演習（通年科目）を担当している。前期授業では対象者に合わせた目標設定とセッションプランの立て方、音楽療育の具体的な実践

方法等を指導し、後期授業では主として実習のための実技指導を行なっている。

実習全体は専任教員の指導のもとで行なわれ、筆者が指導するのはその中の一部分である。つまり、本稿で取り上げる実習以外にも、学生たちは多くの実習を経験していることを断っておきたい。

前稿『保育音楽療育演習における実習経験の共有をめざす教育実践 [Ⅰ]』（夙川学院短期大学教育実践研究紀要第3号）においては、保育音楽療育演習の授業内に行った「実習前のリハーサル」と「実習後の報告」に関する選択式アンケート調査（4領域20項目）の結果を考察した。

本稿はそれに続く内容で、2009年度履修生（45名）および2010年度履修生（13名）、合計58名を対象として実施した記述式アンケートの結果と考察である。このアンケートでは、「自分のリハーサル」「自分の報告」「他者のリハーサル」「他者の報告」の有効性についてそれぞれを具体的に記述するよう求めた。ここで取り上げる実習は、全員が同時期に実習を行

うスタイルではないため、授業での「実習前のリハーサル」と「実習後の報告」を通して学生同士が実習経験を共有することをめざした。

実習直前の学生は自ら作成したプランに基づいて音楽療育活動のリハーサルを行い、教員や他の学生からアドバイスを受ける。実習を控えた学生がリハーサルを通して他者からの客観的な意見を受け止め、問題点や課題に気づき、それらを改善・克服することによって自信をつけ、実習に臨むことを期待した。

また、実習を終えた学生は施設や対象者の様子、音楽療育活動の実際について翌週の授業時に報告する。まだ実習を経験していない学生にとっては、先に実習を経験した学生の報告を聞くことにより、実習への不安が軽減されると期待した。

## 2. 方法

### 2.1 調査対象・期間

調査対象は2009年度履修生（45名）および2010年度履修生（13名）、合計58名である。調査期間は、実習のリハーサルと報告を行った後期授業期間（2009年10月～2010年1月、2010年10月～2011年1月）である。実習が終了した2010年1月末および2011年1月末に無記名の記述式アンケート調査を実施した。

### 2.2 手続き

記述式アンケートより具体的な内容を抽出し、それらを分類する。さらに、筆者の授業記録を参照して考察を行う。

## 3. 内容

### 3.1 「実習前のリハーサル」の概要

後期授業開始時に「実習前のリハーサル」の目的を伝え、以下のリハーサルの実施手順を説明する。

＜リハーサルの実施手順＞

- ・実習に行く者は、実習直前の授業で音楽療育活動のリハーサルを行う。
- ・リハーサルの時間は、実習施設での音楽療育活動の時間と同じとする。
- ・リハーサルでは、実習で使用する楽器、歌詞幕、道具等を準備して使用する。
- ・実習者以外の学生は、対象者役（障害児や高齢者）

となって協力し、リハーサル終了後、積極的に質問や助言をする。

- ・実習者は、リハーサルで得た経験と、教員や学生からの助言を受けて、音楽療育活動の内容を再検討し、改善して実習に臨む。



[写真1] 実習前のリハーサルの一場面

療育士役の学生を中心に、対象者役の学生たちが半円形に取り囲み活動する。



[写真2] 実習前のリハーサルの一場面

療育士役の学生のリードによりピアノに合わせて体操する。

リハーサル終了後、療育士を演じた学生はリハーサルを通して気づいたことや反省点等を述べる。続いて対象者役の学生が感想と助言を述べ、その後、教員が具体的に助言を行う。

### 3.2 「実習後の報告」の概要

実習後の学生は、翌週の授業時に数分程度の報告を行う。教員は報告の留意点および内容について、



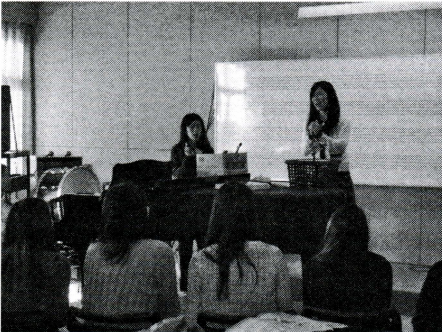
以下のことを伝える。

<報告の留意点>

- ・前に出て、はっきりとした声で話す。
- ・話を聞く人に実習の様子がありありと伝わるよう、わかりやすく丁寧に説明する。
- ・これから実習に行く人が知っておいたほうがいいと思うことを忘れずに伝える。

<報告する内容>

- ・実習の概要  
施設名、実習時間、1日の生活スケジュール等
- ・音楽療育活動  
活動時間帯、クラス・グループ名、対象者の障害の程度や反応、活動内容、職員の様子
- ・感想、反省、課題、改善方法等
- ・申し送り事項



[写真3] 実習後の報告を行う学生

3.3 アンケートの内容

次の4つの設問に対し、自由記述による回答を求めた。

- ・自分のリハーサルはどのように役立ったか
- ・自分の報告はどのように役立ったか
- ・他者のリハーサルはどのように役立ったか
- ・他者の報告はどのように役立ったか

4. 結果

4.1 自分のリハーサルの有効性

「自分のリハーサルはどのように役立ったか」という設問に対する記述内容を、4.1.1～4.1.5の5項目に分類した。[例1～12]は、それぞれに含まれる小

項目の一部に対応する記述の抜粋である。

4.1.1 セッションの内容

- ・プランや活動内容を改善できた [例1]
- ・時間配分を改善できた [例2]
- ・実習までの見通しを立てられた [例3]
- ・臨機応変に対応する必要性に気づいた
- ・セッションの雰囲気把握できた
- ・準備物の工夫の必要性に気づいた
- ・準備を確認できた

[例1] もしリハーサルがなかったら、セッションの問題点を見つけられなかったと思う。プランを改善して実習に臨めてよかった。

[例2] リハーサルでは、思っていたよりも時間がかかってしまいました。プログラムの展開に無理があることがわかったので、それぞれの活動の時間配分を考え直し、実習はうまくいきました。

[例3] リハーサルで全体の流れを実際に経験できたので、実習までに自分が何をすべきなのか、頭の中を整理できました。

4.1.2 音楽の技能・使い方

- ・伴奏法を改善できた（調性、速度、音量） [例4]
- ・合図の出し方を改善できた [例5]
- ・対象者に合わせたアレンジ法を学んだ
- ・歌詞を覚える必要性に気づいた

[例4] 実際に歌ってみて、高齢者には調が高すぎることに気づきました。速度ももっとゆっくりしたほうがいいとわかりました。

[例5] ピアノ伴奏との合わせ方や、指揮の合図を出すタイミングなどを確認できた。

4.1.3 対象者とのコミュニケーション

- ・話し方を改善できた（言葉遣い、声の大きさ、速さ） [例6]
- ・対象者への受け答えを改善できた
- ・対象者の反応（行動、発語等）を予測するようになった [例7]
- ・対象者に目配りができるようになった

[例6] はじめは高齢者に敬語で話しかけるのが難しかったです、リハーサルで少し慣れました。

[例7] こちらの言葉掛けに対象者がどのように反応

するかを考えてから、話したり動いたりするようになりました。

#### 4.1.4 実習への心構え

- ・緊張に慣れた [例8]
- ・余裕が生まれ不安を軽減できた [例9]
- ・不十分な点を認識した [例10]

[例8] 人前に出てリハーサルをすることで、自分がどのくらい緊張するのかがわかりました。緊張に慣れることができました。

[例9] リハーサルがあったことで、本番では焦らずにできました。対象者の様子を見る余裕も出てきました。

[例10] 自分ではなんとかなると思っていましたが、リハーサルで皆の前に立つと、できないところが明確になって、よかったと思います。

#### 4.1.5 他者からの意見

- ・教員や学生からのアドバイスが役立った [例11]
- ・アドバイスを受けて自信がついた [例12]

[例11] 自分たちで考えたセッション案に対して、思いもつかなかったような意見を友人がたくさん言ってくれました。人の意見をたくさん聞いて取り入れて動いてみることも、成長の一步なのだ学びました。

[例12] リハーサルでは、先生や他の人から指摘されたり、ほめてもらうことで、自信を持って実習に臨むことができました。

#### 4.2 自分の報告の有効性

「自分の報告はどのように役立ったか」という設問に対する記述内容を、4.2.1～4.2.2の2項目に分類した。[例13～16]は、それぞれに含まれる小項目の一部に対応する記述の抜粋である。

##### 4.2.1 実習のフィードバック

- ・実習を振り返り整理できた [例13]
- ・質疑応答により新たな気づきを得た [例14]

[例13] 実習を振り返って、次に実習に行く人のために何を伝えていけばいいのかを考えることで、自分の頭の中も整理できたと思います。

[例14] これから実習に行く人から質問されて、自

分では気づけなかったけれど、不十分だった点に気づきました。

##### 4.2.2 報告の技能

- ・報告の手順や伝え方を学んだ [例15]
- ・質疑応答を通して伝達内容を確認できた [例16]

[例15] 自分の経験をまとめて話すことは難しかったです。でも、少しずつ話す内容を整理できるようになりました。

[例16] 質問されてはじめて、伝えておいたほうがいい内容に気づきました。

#### 4.3 他者のリハーサルの有効性

「他者のリハーサルはどのように役立ったか」という設問に対する記述内容を、4.3.1～4.3.4の4項目に分類した。[例17～25]は、それぞれに含まれる小項目の一部に対応する記述の抜粋である。

##### 4.3.1 セッションの内容

- ・プラン作成のヒントを得た [例17]
- ・活動を考えるヒントを得た [例18]

[例17] 自分では考えつかないような活動の展開があって、プラン作りの参考になりました。

[例18] 他の方のリハーサルは、もっとこうしたほうがいいのではないかと、ここがよかったなど客観的に見ることができて、自分の実習に役立ったと思います。たくさんのアイデアも知ることができました。

##### 4.3.2 音楽の技能・使い方

- ・音楽の使い方が広がった [例19]
- ・調性や速度の大切さに気づいた [例20]
- ・伴奏技術の必要性に気づいた
- ・合図の出し方を学んだ

[例19] 対象者が参加しやすいリズムで合奏するなど、参考になりました。

[例20] 伴奏者によって歌いやすい調と、歌いにくい調がありました。

##### 4.3.3 対象者とのコミュニケーション

- ・対象者の気持ちが理解できた [例21]
- ・心地よい展開の大切さを知った [例22]



・対象者への声掛けの大切さを知った

[例21] 対象者の立場でリハーサルを経験して、対象者の気持ちが少しは理解できたように思います。

[例22] 対象者にとって楽しい活動であることや、全体の流れが大切であることがわかりました。

#### 4.3.4 療育士の在り方

・療育士の言動を客観視できた [例23]  
 ・療育士らしい話し方を学んだ（声の大きさ、速さ、言葉遣い、間の取り方） [例24]  
 ・療育士らしい態度を学んだ（表情、身振り、視線等） [例25]  
 ・気になるしぐさに気づいた（髪を触る、下を向く、姿勢が不安定等）

[例23] 対象者の目には療育士がどのように見えているのか、よくわかった。

[例24] 話し方など、他の人の良いところは見習って、良くないところは、自分は改善するようにしようと考えることができました。

[例25] 他の人のリハーサルを見たり聞いたりして、話し方や身振りをこうすれば相手にわかりやすいということを学んだ。そして、自分の実習で学んだことを実践すると、対象者の反応が違うように感じた。

#### 4.4 他者の報告の有効性

「他者の報告はどのように役立ったか」という設問に対する記述内容を、4.4.1～4.4.3の3項目に分類した。[例26～32] は、それぞれに含まれる小項目の一部に対応する記述の抜粋である。

##### 4.4.1 施設と対象者

・施設の概要を把握できた（雰囲気、生活のリズム等） [例26]  
 ・対象者の特徴を把握できた（身体的・心理的特徴、音楽の嗜好等） [例26] [例27]  
 ・対象者の反応を把握できた  
 ・セッション環境を把握できた（部屋の広さ、ピアノ・机・椅子の配置、職員数等）

[例26] 自分の実習までに施設の情報がわかり、とても良かったです。対象者はどのくらい体を動かせるのか、どんな楽器を使えるかなど細かく知る

ことができ、実習のプランが立てやすくなりました。

[例27] 対象者のできること、難しいことがわかったことよってプランを組み立てやすくなりました。対象者との関わりの中で気をつけなければならないことや、1日の流れ、音楽の好みなどをすることができ、心の準備にもなりました。

##### 4.4.2 実習への心構え

・不安が軽減された [例28]  
 ・心の準備ができた [例29] [例30]  
 ・前向きな気持ちになれた [例31]

[例28] 初めて行く施設に不安があったので、話を聞いたことで少し安心できて、落ち着いた気持ちで自分の実習に行けました。

[例29] 私は実習の時期が一番最後だったので、自分の行く実習先の報告がとても勉強になりました。心の準備をする時間もたくさんあって、こういうことはしてはいけないなど、たくさん教えてもらったことが役立ちました。

[例30] 最終グループの実習だったので、先に実習に行った人たちの話をたくさん聞いて勉強になった。心の準備もできて実習に臨めたと思う。

[例31] 他の人の実習の成功談も失敗談も聞き、どうやったらうまくいくかを考えると、さらにいい案が浮かんで自分の実習につなげることができました。

##### 4.4.3 自分の実習との比較

・自分の実習の振り返りに役立った [例31]  
 ・音楽療育のイメージを広げられた [例32]

[例31] 私は早い時期に実習が終わっていたので、後から実習した人の報告を聞いて、自分の実習を振り返ることができた。そして新たに気づくこともあった。

[例32] 自分が実習する施設とは異なる施設の報告も聞けたので、音楽療育のイメージが広がった。

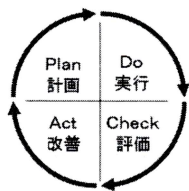
## 5. 考察

### 5.1 リハーサルと報告の機能

「実習前のリハーサル」と「実習後の報告」を一体化して考えた場合、それは企業等の生産管理や品

質管理のPDCAサイクルと同様の機能を持つと捉えられる。PDCAサイクルとは、「Plan（計画）→Do（実行）→Check（評価）→Act（改善）」の4段階を繰り返すことにより、継続的かつ循環的に改善を行うシステムである。

学生たちが作成したセッションプランをリハーサルによって実行し、それを自分と他者によって評価し、改善を加えて実習に臨む。実習後には報告を行い、それを評価し、さらに改善を加えて次の実習に臨む。グループ全体で取り組んだりリハーサルと報告によって実習経験が共有され、先に実習した学生から後の学生へと橋渡しされながら、保育音楽療育士をめざす学生たちの資質向上に役立ったと考える。



〔図〕PDCAサイクル

## 5.2 自分のリハーサルの有効性

自分のリハーサルを経験することにより得られた気づきには、「自発的な気づき」と「他者からの指摘による気づき」の2種類がある。

アンケート記述の中には、「自分では完璧なプランができたつもりで、なんとかなるだろうと思っていた」というような内容も複数あり、頭で描くイメージと現実との落差に戸惑い、自発的な気づきを得た学生は多かったと推察する。この経験により、リハーサルと実習本番との違いも大きいことが予測できるようになり、ある種の覚悟（心の準備）ができたと考えられる。

リハーサル後に行う助言に関しては、筆者は褒めることと改善を求めることのバランスを配慮して指摘するよう心掛けたが、実際には改善を求める箇所が大部分を占めた。指摘の一部については、概ね本人も気づいていることが多いという印象を持ったが、それ以外の指摘箇所については本人は無自覚であった。つまり、他の学生や教員からの指摘と助言により、療育士役の学生が無自覚であった言動が明確になり、改善することができた。

また、学生たちはリハーサルを経て十分な準備で

実習に臨めば、不必要な緊張や不安に悩むこともないという気づきを得ている。リハーサルでの失敗を糧として、実習へと挑戦することの意味を見出したと考えたい。

## 5.3 自分の報告の有効性

4つの設問の中で記述文字数をもっとも少ない項目で、早い時期に実習を終えた学生の中には、時間が経過して印象が薄くなっている者もあった。

実習後の報告は、自分の経験を客観視し他者に伝えるためのコミュニケーション技術のトレーニングでもある。話す内容を整理し、話し方を工夫することは、保育音楽療育士には欠かせない資質である。質疑応答によって別の角度から光が当てられることもあり、一人ひとりの実習経験をグループで共有することが新しい視点の獲得や新たな気づきにつながったと考える。

## 5.4 他者のリハーサルの有効性

他者のリハーサルにおいて対象者役を演じることは、対象者の立場や心理を想像する体験となった。対象者には療育士がどのように映るのか、気になるしぐさは何か、対象者が楽しめる活動とは何かといったことを考えることで、療育士の在り方を客観視できるようになった。

また、他者のリハーサルを冷静に観察し、自分の立場に置き換えることにより、自己を客観視する機会となったと考える。あるときは他者を良き見本とし、またあるときは「他山の石」として、自分の成長に役立てようとする様子がアンケートの記述から窺える。

## 5.5 他者の報告の有効性

実習前の学生にとって他者の報告は、施設や対象者の情報を広く収集する機会であった。音楽活動を療育の一環として成立させるには、対象者を深く知ることが不可欠であり、それによって明確な目的を持つプランの作成が可能となる。実習前に有用な情報を得たことにより、学生たちは対象者に適した療育的な活動を考案することができるようになった。また、心理面においては不安や緊張が軽減し、前向きな気持ちで実習に臨むことができたと考えられる。

## 6. まとめ・課題

ある学生はリハーサルの経験を通して「療育士の目線と対象者の目線の両方を感じることができた」と述べている。このように両者の立場を想像しながら行き来することは、障害を持つ子どもや高齢者と関わる保育音楽療育士のみならず、保育者をはじめとする数々の対人援助職にとって重要な資質であると考えられる。これからも学生たちが自他の経験から学びを深め、さらに被援助者からも多くを学び取れるよう、工夫しながら教育実践に取り組みたい。

最後に、実習全体を指導される倉掛妙子先生から筆者の教育実践に多くのご助言を賜ったことに、心からの感謝を申し上げます。

## 7. 参考文献

- 朝野典子（2010）保育音楽療育演習における実習経験の共有をめざす教育実践〔I〕—「実習前のリハーサル」と「実習後の報告」に関するアンケート調査結果より— 夙川学院短期大学教育実践研究紀要第3号
- 松井紀和（1991）小集団体験 東京：牧野出版
- キャロライン・ケニー（2006）フィールド・オブ・プレイ 音楽療法の「体験の場」で起こっていること 東京：春秋社
- 吉田耕作（2005）ジョイ・オブ・ワーク 組織再生のマネジメント 東京：日経BP出版センター

### <ピアスーパーバイザーからのコメント>

本論文で最も印象に残ったのは「途中で課題を投げ出しそうになった学生が、最後までやりぬいたことで、学生自身が自分自身の成長に気づいた。」ということである。このことから、学生ができないことができるようになった達成感によってやればできるという自信を持たたと推察できる。また、保育音楽療育演習の実習を経験することで、学生が他の履修科目においても、やればできるといふ前向きにとりくむ姿勢が発生すると思われる。

（担当：家政学科 藤島 みち）